
チートな能力の転生者

鍛冶野 雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートな能力の転生者

【Nコード】

N8030P

【作者名】

鍛冶野 雅

【あらすじ】

なぜか死んでしまった俺。目の前には神と名乗る女の子…この流れって、まさか転生か？
思いっきり原作ブレイクする可能性大！苦手な方はここで引き返すことをお勧めします。

第1話 もしかして…俺、死にました？（前書き）

初投稿です。ご容赦ください。

第1話　もしかして…俺、死にました？

はて？なぜに俺はこんな所にいるんだ？俺は毎月購読してる雑誌を買って、学生寮に向かつていたはず…だよな？

なのに…周りは真つ白で遠近感が無くなるし？なんか見たことない女の子が土下座してるし？いったい何が起きたんだ？まあ、状況を進展させるにはこの子に話しかけるしかないな。

「あのー、ちよつといいかい？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

「…（うゝむ…ごめんなさい連発ってどっかで見たような？）」

「私が悪いんです上司の言うことに逆らえない私が悪いんです許してくださいごめん…」

「おゝい！とりあえず話を聞かせてくれって！」

「ひ！？」

「いや、怯える前に話を聞かせてほしいんだけど？」

「はひゃい！全とお話しさせていただきます！だから殴ったりとか痛いことは勘弁してください！」

「え？俺そんな男に見えんの！？いやいやしないよ！？女の子に手はあげないよ！？」

「ほ…本当ですか？」

「うん。本当。絶対に手を上げないことを約束しよう。」

「よかった…では、お話をさせていただきます。」

「まずは謝罪させていただきます。ごめんなさい！」

「えつと、なにが？」

「あなたが死んでしまったことです。」

「…あゝ、まさかとは予想してたけどマジですか。」

「はい…って、予想してたんですか？」

「まあ、だてに何冊も本を読んでるわけじゃないよ。似たような話はいくつも読んでるし、さっきまで帰路についてたのが、いきなりこんな所にいるとなれば、俺は死んだか臨死体験中だと思うしね。」
「なるほど…」

「そして…同様に君の正体も予想がついてる。」

「え？」

「まず、選択肢は2つほど。神様が、キリスト教という天使か。」

「はあ。」

「で、さっき言ってた上司に逆らえないって言ってた事と、君の外見から判断すると、東洋の宗教の人生か、人の命を司る神様じゃない？」

「…当たりです。では、自己紹介させていただきます。私は人の人生を管理する神です。名前はありません。」

「ふむ、どっかの神話で言うノルンとおんなじか。…じゃあ、呼ぶのに不便だし適当に名前考えさせてもらうよ？」

「はい。御自由にどうぞ。」

「ん…ノルン…英語だと、ウルドだったよな？…そうだ！日本名で織姫でどうだ！？」

「お、織姫！？そんないい名前でもいいんですか！？」

「もともと英名ウルドには、織姫って意味があるんだよ。いいんじゃない？」

「あ、ありがとうございます！」

「いえいえ。じゃ、いらないかもだけど自己紹介な。俺は性は鍛冶野、名は雅。どこにでもいる専門学生だよ。」

「はい、存じ上げてます。」

「じゃあ、詳しい話を聞かせてもらえる？」

「はい。あなたは雑誌を買って部屋に帰る途中で、暴走車両に撥ねられて亡くなりました。映像見ます？」

「いや、やめとく。血を見るの好きじゃないし、自分ならなおさら。」

「そうでしょうね。じゃあ続けます。実のところ、あなたはあの事故には遭遇しない予定でした。本来は97歳くらいまで生きる予定だったんです。」

「わゝお。地味に長く生きるはずだったのな俺。なのに死んだ理由は？」

「上から、ある実験の為に適当な人間を殺して、そのモルモットにするように通達が来たんです。因みに、選定法は阿弥陀です。」

「…なんて確立だ。で、その実験って？」

「あなたの世界には、様々な物語が存在してますよね？ゲームなり本なりアニメなり。」

「あゝ、まあね。創作が大半だけど。」

「その世界にイレギュラーが存在し、もとの話から外れるとどんな話になるのかという実験です。」

「つまりは原作ブレイクってわけか。」

「はい。すなわちあなたはこれから、様々な世界に行って頂き、自由に行動してもらいます。」

「ふむ？要はがんがん原作壊しまくれと？知らない作品の場合は？」

「自由に動いてもらって結構です。その主人公に成り代わってもらう所もあれば、新たなキャラクターとなって参加してもらう場合もあります。特典として、いくつか好きな設定をお付けします。」

「ふーん。ま、了解したよ。」

「いいのですか？」

「うん。まあ死んじやったからにはしょうがないし？ただ、母さん達には迷惑かけたくないんだけどね。」

「はい、財政的には困らないようにさせてもらいます。人の命をお金で処理できるわけじゃありませんが…」

「んゝ、まあうちの現状考えるとそれが一番いいかもだね。」

「ごめんなさい…」

「もういいって。君が悪いわけじゃないしね。さて！じゃあ設定をお願いしようかな！」

「あつはい！ではご要望をお願いします。」

「まずは、魔力と気を無制限で使いたいかな？」

「了解です。次は？」

「その二つを効率よく使えるようにしてもらえる？」

「はい。」

「次に、身体能力の強化。外見の変化なしで無敵クラスに。」

「この時点で原作ブレイクしやすそうですね…」

「まあねー。で、俺が前に考えた体術を実用可能にしてほしいんだけど。」

「前に考えた体術？ちよつと記録をチェックしますね…。…ってこれ…すごいですね。」

「あははは。それと、完全記憶能力。」

「はい。…あの、あと一つくらいをお願いします。」

「オツケー。じゃあ、最後に俺が前に考えた能力があるんだけど、それを付けることってできる？」

「チェックします。…実現は可能ですけど…よくこんなの考え付きましたね。」

「想像力は豊富だったからね。じゃあよろしく。で、まずはこの世界？」

「あ、その前に容姿はどうします？」

「あゝ、それがあつたか…織姫、一つ質問。」

「はい？」

「君は俺の世界のアイドルであるジャニーズの人たちをどう見る？」

「え？えっと、かつこいいいなーと思いますけど？」

「そつか、じゃあ容姿に関しては君に任せるよ。」

「？はい。わかりました。」

「あ、そうだ、なにか便利な収納用具がほしいんだけど？」

「あ、それについてはこのコートはどうぞ。その内側にいろいろなものを入れます。」

「ありがとう。あとさ、一つ思ったんだけど、原作ブレイクして元

々の作品に影響はないの?」

「それなら問題ありません。その世界をコピーした世界に入っても
らいますから。」

「なるほどねー。その辺はしっかりしてるわけか。で、初めはどこ
の世界にいくの?」

「そうですね、…ゼロの使い魔なんてどうですか?」

「ふむ、原作知らないけどいいか。」

「じゃあいつてらっしゃい。期待してますね。」

「あいよ。…ってどうやってい「ガッ!」「けばって…穴ー!」?」

「すいません、上からの命令で…」

「そこは断って欲しかったー……」

「ごめんなさい。でも、応援してますね。」

第1話 もしかして…俺、死にました？（後書き）

初投稿です。ご意見感想などありましたらお願いいたします。

主人公設定（前書き）

今回は主人公の紹介です。

主人公設定

名前 鍛冶野 雅（かじの みやび）

神様の実験で不条理に殺された専門学生。好物は甘い菓子や煎餅。

身長 180cm

体重 70kg

髪の色 黒

好きな事 読書（速読ができる）

使用体術 独自で考えた（敵にとって）理不尽な体術『鳴金流体術』
能力 作者考案のチート能力『スキルメーカー能力創造』

以上2つは作品内で詳しく載せます。

武器 様々な小説等に登場する武器。現在確定しているのは、刀語の変態刀です。

オリジナルの変態刀も出そうと思っています。

それ以外の武装 裏地に様々な物を収納できる黒いコート、白いロングTシャツ、ジーパン、鉄板仕込みのブーツ。

この設定は後々変化する可能性があります。ご了承ください。

主人公設定（後書き）

今回は主人公の紹介のみです。細かく書いてないのは許してください。

第2話 初の異世界、どんな話だっけ！？（前書き）

年が明ける前に投稿します。 雑になってるかと思われますので、ご注意ください。

第2話 初の異世界、どんな話だっけ！？

神様に勝手に殺されて、実験を手伝うことにした俺は今…

大絶賛落下中だった。

「ちくしょー！織姫のやつ覚えてやがれー！戻ったら一回拳骨決定だー！」

《すいませんすいません！上からの命令だったのでー！》

「うお！？織姫！？どこだ！？」

《あの、これは念話ってやつなので…それより！伝え忘れたことがあるんです！》

「？伝え忘れたこと？なんだそりゃ？」

《えっと、まずは武器に関することです。》

「ああ、そっぴや聞いてなかったな。でもゼロの使い魔の世界だと主人公は武器を買ってもらうんじゃないかったか？」

《それはそうなんですが、一応用意しました。あなたに差し上げたコートの中に、いくつか収納されてます。後々追加するかもしれないので、その時は連絡します。》

「了解。ってか今は何があるの？」

《えっと、小説の刀語に登場する変態刀すべてと、オリジナルの刀を一振り入れてあります。》

「…そりゃすごい。ほかに伝えることは？」

《あとは、そのコートの中に食料も入れてありますが、腐ることはありません。》

「ふむふむ。出し方は何とか覚えてみよう。」

《おねがいします。それと、こちらに連絡を取りたいときは頭の中で呼びかけてくださればいいので。》

「わかった。いろいろありがとう。」

《いえ、こちらがお願いしてますので。》
「それもそうか。でもお礼は言っとくよ。」

そのとき、落ちる先から『ブウン』という音がした。
雅がそちらを見ると…

「織姫ー？一つ質問いいか？」

《？なんですか？》

「…なんか先に鏡があるんだが…？いつもこうなのか？」

《鏡？いや、普通はそのまま出口になるんですが…》

そんな会話をしてる間にも鏡に近づいていく。

「これは…ここに突っ込めってか？それしかなさそうだなー…」

《って！なんでそんなに冷静なんですかー！？》

雅は冷静なのではない。ただ単に現状を見つめてあきらめただけである。

そのまま鏡に突入する。

「？重力のかかる方向が変わった？」

そう。さっきまでは頭から落ちていたのに、背中を下にして平行飛行していたのだ。

それが意味することは即ち…

「『ズザー！』あだだだだだ！」

《大丈夫ですか！？》

水平方向の運動エネルギーを残したままの落下である。

「そりゃそうか。ったたた…なまじ頑丈な体でよかったよ。」

《…結構な衝撃だと思っんですけど。》

「平気平気！じゃあこのまま進んでみるわ。途中で能力作りたいから念話切ってくれ。」

《はい。一応チェックしますが、お気をつけて。》

「ありがと。じゃあまたな。」

そうして念話を切った後、雅はひたすら前に進んでいた。

「うーん、『アナライズ・アイ鑑定眼』と基本的な属性制御の能力は作ったし、レポートも作った。あとは…上条さんの能力も作るかなー…？と？」

そうこうしていると、正面に先程と同じ鏡が現れた。

「ふむ、要するにこれをくぐるのか。」

そういつて鏡に向かっていく。その直後に何が待っているのかも知らずに。

第2話 初の異世界、どんな話だっけ！？（後書き）

とりあえず、一年が終わる前に投稿しました。

次回からゼロの使い魔編始まります。ですが私はアニメも見てませんので、そのところはあしからず。
では、よいお年を！

第3話 忘れてた、友人と見た、原作を（泣）（前書き）

新年初投稿です！都合上時間がないので駄文になることが予想されます。

第3話 忘れてた、友人と見た、原作を（泣）

時間は少々戻り、トリステイン魔法学院

「では、次が最後だ。――ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

と、教師が最後に残った生徒の名を読み上げる。

「はい！」

その声に、はつきりとした声で答えるのはピンクの髪の少女である。

「本当にできるの？」

「何を出すかが見ものだ。」

「むしろ何も出なかったりして。」

そう陰口を叩かれているが、いつものことなので無視をして詠唱を始める。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、五つの力を司るペンタゴン、われの運命に従いし…使い魔を召喚せよ！」

その瞬間…

『ボン！』

と爆発が起きた。

「おわつと！？」

そして、何かが着地する音と、人らしき声がある。

煙が晴れたそこにいたのは…黒い外套のようなものをまとった、黒髪の青年であった。

「あゝ、驚いた。なんだったんだ？ってかここどこだ？」

「あなた…誰？」

「へ？」

雅が声のほうを向くと、そこにはピンクの髪の少女がいた。

「（あゝ、見たことあると思ったらルイズか。ってことは転移はできたみたいだな。下に魔方陣が書いてあって俺がその中心にいるってことは、サイトに変わって俺が召喚されたってことか？となると主人公と入れ替わるパターンだな。ってゆーと…はて？このあと何かあったような？）」

そんなことを考えていると、ルイズが先生と話をしてこちらに向かってくる。

「じつとしてなさい。」

「へ？」

そして、ルイズは雅の頭をつかみ、詠唱を始めた。

「五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え、われの使い魔となせ…」

そして、ゆっくりと顔を近づけて…キスをした。

「！？（思い出したー！使い魔の契約の儀式ってキスだったんじゃないか！？なんで忘れてたんだー！？）」

そして、左手に痛みを感じた。何気なくみるとルーンが刻まれている。

「（あゝなるほど。サイトが痛がるわけだ。でも何て書いてあるかはわからねーなこりゃ。あとで解析してみるか。）」

「ほおゝ、…ずいぶん珍しいルーンだな」

教師は左手のルーンを覗き込んだ。

それと時を同じくして生徒の一人が大声を出す。

「平民を召喚するとは、さすが ゼロのルイズ だな！」

その言葉を聞いたとたんに、雅は苛立ちを感じた。

「（この手の野郎がどこにでもいるのは当然だろうけど、やっぱ昔と変わらずむかつくな…）おい、その小僧…。うちのマスターを愚弄するんなら…覚悟してもらうことになるぞ。」

能力を使い、その生徒のみに囁くと同時に圧倒的な殺意を飛ばす。

「ひ！？」

その生徒が腰を抜かしたので少しすっきりした。

「それではこれで儀式を終了します。各自寮へ戻るように。」

生徒たちは空を飛んで帰っていく。

「貴女はいかないのですか？」

「…飛びたくても飛べないのよ！」

そう切り返される。すると…

「では、お送りします。」

「なにを…ひゃわ！？」

雅はルイズを抱え、空気を操作する能力で空を飛んでいく。

「…あんた、何者！？」

「そういえば、自己紹介がまだでしたね。私の名は鍛冶野雅。貴女の使い魔になったものにして、何でもできる能力者ですよ。」

第3話 忘れてた、友人と見た、原作を（泣）（後書き）

今回はここまでです。中途半端かもしれませんがすいません。
御感想をお待ちしております。

第4話 自己紹介と使い魔の仕事。（前書き）

遅れてすみません。現在原作知識を吸収中です。
これからこんなことがあると思われませんが、温かい目で見てやってください。

第4話 自己紹介と使い魔の仕事。

「さて、では改めて自己紹介させていただきます。私は性は鍛冶野、名は雅といいます。」

貴女の使い魔として召喚された者です。これからよろしく願います。」

「じゃあ私も名乗っておくわね。私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。これからあんたの御主人様よ。」

「ふむ、ではそのように呼びますか？」

「へ？どういこと？」

「いや、これから呼びする際は『御主人様』とお呼びしますかと聞いてるのですが…」

「…そうしようかと思ったけど、なんかあんたにそう呼ばれるとゾワッとするからいいわ。」

「では、ルイズ嬢と呼びしますか？なんとなくそんな呼び方が浮かんだのですが…」

「それでいいわ。で、さっき何でもできるって言ってたけど、何ができるの？とてもそうは見えないんだけど？」

「そうですね…。まずは普通の使い魔が何をするのか教えていただけますか？」

「そうね。まず、主人の目となり、耳となる能力が与えられるわ。」

「ふむ、なるほど。」

「でも、あんたじゃ無理みたいね。何にも見えないもん!」

「申し訳ありません…」

「それから、主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね」

「秘薬とはどのようなものでしょうか？」

「特定の魔法を使うときに使用する触媒よ。硫黄とかコケとか…」

「それは出来そうですね。何が必要か申し付けてくださればですが…」

「そして、これが一番なんだけど…、使い魔は、主人を守る存在であるのよ!その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目!」

「それなら得意分野ですよ。」

「で?あんたは何ができるの?」

「まずは、アナライズ・アイ観察眼と申しまして、この目で見たものを分析、理解することが可能です。ついでに生物の弱点も認識できますね。」

「それって急所とか?」

「それと、苦手とするものですね。寒いのが苦手とか火を嫌うとか。」

「べんりね。」

「あとは、さまざまな属性を制御できる能力もあります。火、水、風、土、木、鉄、など様々なものです。」

「…あんた実はメイジじゃないの？」

「いえいえ、能力者です。詠唱要りませんし。」

「それって最強じゃないの？」

「いえいえ。それから、この黒衣の内側に様々な武器を収納しています。」

「見せなさい。」

「構いませんが…どれにします？全部出すとこの部屋じゃ手狭ですよ？」

「…なら一つでいいわ。（どれだけ持つてるのよ!？）」「

「（何がいいかなー？じゃあ双刀でいいかな？）でわ、よっと…つておわ!？」

—ズンッ!—

「ひゃ！？何よそれ！？床にめり込んでるじゃない！？」

「えっと、これが一つ、双刀・鎚そうづ・かなづちです。『重さ』に重点を置いた刀です。」

（つてか持てないなこれ。使い方は理解できるから、ガンダールのルーンは有効みたいだけど、身体能力強化でも持てないってどれだけ重いんだよ。）

「…まあいいわ。しまいなさい。それと床も直すように。」

「はい。」

雅は鎚の上にコートをかけて収納し、石を操作して修正した。

「これでよしと！まあ、こんなところですよ。」

「はいはい。さてと、しゃべったら、眠くなっちゃったわ。」

「わかりました。…で、私はどこで眠ればいいのでしょうか？（嫌な予感しかないんだけど…）」

ルイズは床を差した。

「…本気ですか？」

「あんたはわたしの使い魔でしょ？洗濯と掃除は勘弁してあげるわ。」

「…ありがとうございます。ですが、流石に床はつらいので能力を使って壁に空間を作ってそこで休ませていただきます。」

「ふーん…。って！？空間まで作れるの！？」

「はい。簡単なものですし、小さいですが、休むだけの空間は作れます。」

「…もういいわ。あんたが規格外だったのは十分わかったから。」

「はい。でわ、お休みなさいませ、ルイズ嬢」

「はいはい、お休み」

その後、作った空間にて…

「あ、そういえば体術の説明忘れてた…。まあいいや、今度説明しよう。」

そう納得して眠ったのだった。

第4話 自己紹介と使い魔の仕事。（後書き）

感想お待ちしております。

第5話 食事の確保を第一に！（前書き）

こんな流れでいいのかなー？

第5話 食事の確保を第一に！

翌朝、雅は目覚めた後、ルイズの着替えを手伝った。（流石に恥ずかしかったが、心頭滅却して行っただ）

そして一緒に部屋を出ると、近くの部屋から赤い髪の少女が出てきた。

「おはよう。ルイズ」

ルイズも顔をしかめながら挨拶する。

「おはよう。キュルケ」

「それがあなたの使い魔？」

キュルケが雅を見ながらバカにしたように言う。

「そうよ。」

「あははは！本当に人間なのね！」

笑い出すキュルケにムツとしながら、雅は語りかけた。

「キュルケ様？人を見かけで判断してはいけません。私はこう見えてもいろいろなことができますので、ただの人間ではありません。それに、ルイズ嬢が失敗が多いといっても、何一つ失敗しない人間なんていないですよ？貴族であるなら、人を見下してはいけません。」

「…いうわね、あなた…。でも、どうせ使い魔にするなら、こういうのがいいわよねえ。フレイム」

呼ばれて出てきたのは、真っ赤で巨大なトカゲだ。

「おや、火トカゲ…サラマンダーですか。…というと、キュルケ様は火を得意とするメイジですね？」

「あら、そこまで分かるのね…。あなた、お名前は？」

「鍛冶野^{かしの} 雅^{みやび}と申します。雅とお呼びください。」

「ふーん、ミヤビ…ね？じゃあ、お先に失礼。あ、それとミヤビ？あたしに『様』は付けなくていいわ。あなたの言葉に免じてね。」
「かしこまりました、キュルケ嬢。」

それを聞くと、キュルケは颯爽と去って行った。サラマンダーがその後を追う。

「…むう」

「？どうしたのですか？ルイズ嬢？」

「なんであの女とあんなに話すのよ！？」

「む？なにかまずかったですか？ルイズ嬢のご学友と思いましたが…」

「…ご学『友』…！？ツエルプストーが！？冗談じゃないわよ！」

「…なるほど、個人的に気に入らないのと、家系的に気に入らないという点で敵対しているわけですね。失礼いたしました。」

「ふん！わかればいいの。いくわよ！」

食堂に到着し、座る席を探す。

「ルイズ嬢。こちらにどうぞ」

雅が椅子を引いてルイズを呼ぶ。

「あら、言われなくてもやるなんて、なかなか気が利くじゃない。」
「いえ、女性にはこうするものだ」と『向う』で叔父に教わってしましたので。…ところで、私はどこで何を食べればよいのでしょうか？」

嫌な予感がする。

その予感を裏付けるようにルイズが床を指差した。その先にあるのは肉のかけらが浮いたスープと堅そうなパンが2切れである。

「…なるほど。床でこれを…ですか。」

「そうよ。本来使い魔は外でなんだから。」

そっぴやサイトはどうしてたっけ…。と雅は考え、厨房で賄いを食べていたことを思い出した。

「…わかりました。今回はここでこれをいただきますが、次からは自分で食材を探しますので、食事は別の場所を取らせていただいてよろしいでしょうか？」

「それでいいならどうぞ。」

「ありがとうございます」

…元の世界で料理作れるようにしといてよかった…。と雅は安心し、堅いパンをかじった。

第5話 食事の確保を第一に！（後書き）

短くてすいません！

でもこれが限界なんです！

ご感想お待ちしています。

第6話 なるほど、流石の威力です。（前書き）

やっぱり筆が遅いですが、これが限界っぽいです。
こんな駄文ですが、お付き合いください。

第6話 なるほど、流石の威力です。

雅は元の世界と比べると、とても貧相な食事を終え、ルイズとともに教室に向かっていた。

「ふむ、なかなか趣のある学院ですね。」

「そんなのあんたにわかるの？」

「こう見えても元の世界ではいろいろな文化を体験しました。叔父が会社の社長。こちらで言うならば商人としてなかなか腕が立つ方でして、いろいろな土地のことを教えてくれたのですよ。」

で、その教えてくれた文化の中にこの世界と似たものが存在していたのです。私の世界ではヨーロッパと呼ばれていましたかね？」

「ふーん。…一応聞くけど、あんたのおじさんなんかずるして成功したわけじゃないわよね？」

「?どういうことですか？」

「だって、あんたなんか明らかに平民じゃない力使ってるじゃない。空間作ったり飛んだり「あ！そういえば!」…なによ」

「いや、報告し忘れたことがありますして。」

「なに?くだらないことだったらお仕置きするわよ?」

「いや、私が実行できることについてです。実は、いろいろと物理

的な法則を無視した体術がつかえまして、その名を『鳴金流体術』。また同様の剣術を『鳴金流剣術』というものがつかえます。」

「物理法則を無視してって…どういうこと？」

「極端な話、一定の条件さえ整っていれば何でも壊したり投げたりできるということです。」

「…嫌な予感しかないから後々見せてもらうわ。」

「了解です。それと、私の力はあまり口外しないでいただけませんか？」

「なんでよ？」

「あまり目立ちたくないですし、それにこの力は言わば切り札なんですよ。特に私をただの平民としてみてる人たちには…ね？」

「なるほど…わかったわ。とりあえず授業にするわよ。」

「はい。あ、それと…」

「…今度は何？」

「何か文献を貸してください。文字とか覚えたいので。」

教室につき、とりあえずルイズから適当な書物を渡される。

「とりあえずこれね？っていつか教えなくて読めるの？」

「まあ、アナライズ・アイ解析眼がありますからね。それにこれはほかの方を油断させることができるのですよ。」

「なんで？」

「この文字が読めるってことは、この世界の住民だと確信させることが可能となります。つまり本当にただの平民と思わせることが可能なんですよ。」

そんな会話をしていると、扉が開き先生が入ってきた。

「でわ、私は教室の後ろで待機していますので。」

雅はそういうと、一番後ろに下がっていき、借りた本を読み始めた。授業はほぼ何事もなく進んでいく。途中でルイズをバカにする輩がいたが、濃密な殺気を放って黙らせた。なお、本を読みながらも時折黒板に目を向けて、魔法の理論も片っ端から覚えていく。

「（明らかにこの能力チートすぎるな…自重は…しなくていいか）」
そんなことをしながら授業は進み…

「では、ミス・ヴァリエール。貴女にやってもらいましょう。」

「先生！危険です！」

「…ん？もしかしてルイズ嬢が錬金するイベントか？（とすると、防御しないとやばいかな。）」

そして、原作道理に話は進み…

爆発した。

雅は念動力で壁サイコキネシスを作り、爆風を防いだ。

「（サイトと同じように掃除をしなけりゃいけないな…）」

と考えるながら…

第6話 なるほど、流石の威力です。（後書き）

作「さてさて、今回からしつかりあとがきを書いてみようかなっと思ひまして、キャラとの対談方式で進めたいと思います。とりあえず今回はお試しってことで」

雅「そんなこと言つて結局このまま落ち着きそうだな。」

作「否定はしないよ。肯定もしないけどね」

雅「…まあいいけどさ。で？何すんだ？」

作「とりあえず今回はついでにアンケートを取ろうかと思う。」

雅「アンケート？何に関してだ？」

作「ずばり！これから先君以外のオリキャラを出すか出さないか！まあ、主人公である君のパートナー的なものだね。」

雅「なるほど？で？出すことになつた場合イメージはあるのか？」

作「大まかにはね。でもまずは大前提である出すか出さないかについてってことで」

雅「まあいいか。」

作「では、感想に

1・出してもOK！

2・出すべからず！

のいずれかで投票してくださいませ！期限は…2月いっぱいとなります！」

雅「こんな思い付きでアンケートを取る作者ですが、これからも読んでやってくだ　さい。」

作「扱いがひどいね…。あ！それとどんなキャラがいいかなどもOKです。ほかに、どんな作品を混ぜてほしいかなども受け付けます！」

雅「これで終わりか？」

作「まあ今回はね！では、これからもこの作品を…」

雅&作「よろしくおねがいしまーす！」

お久しぶり&報告です（前書き）

遅れてすみません。いろいろと忙しくて…
まあ、個人的に進級しそこないそうになったただけですが。
今回は報告したいことがあります。

お久しぶり&報告です

皆さんお久しぶりです。

前書きにも書いてありますが、とても重大な報告がございます。

実は、この小説を書くのをやめようと思っております。

理由として、

1、しばらく書かないでいたら、このままゼロの使い魔で書く気力を失った。

2、原作知識0で書いていましたが、知識を補充するのが間に合わない。

という点が挙げられます。

というわけで、まことに勝手ながらこの小説を終了し、主人公の設定などを変更して新しく書き始めようと思います。

短かったです、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8030p/>

チートな能力の転生者

2011年10月7日09時10分発行